



にし けんいちろう ● 2003年産業医科大学医学部卒業。関東労災病院にて内科研修修了後、新日本製鉄株式会社君津製鐵所で産業医修練。産業医科大学産業生態科学研究所労働衛生工学研究室での産業医学専門の卒後修練を経て、2008年東芝機械株式会社沼津本社産業医。2013年4月より現職。2015年4月より、労働者健康安全機構静岡産業保健総合支援センター産業保健相談員。

産業医は“体調が悪い時に必要な人”ではなく 生き生きと仕事をするために“活用する人”

静岡県富士市に本社のあるジャトコ株式会社は、無段階変速機(CVT)をはじめとしたトランスミッションの専門メーカーであり、全世界で社員数約15,000名を数えるグローバル企業でもある。

同社では、各生産現場の安全や健康を担当する「安全健康係長」が配置されていて、安全活動を主体に活動するが、作業環境測定の結果に問題があれば、産業医とともに現場確認を行うという。また、職場巡視においても、作業方法や負荷などを産業医と安全健康係長と一緒に観察し、安全健康係長に対して産業医がよりよい作業管理のためのアドバイスをを行うという。今回は、そんな同社で産業保健活動の先頭に立って活躍している、統括産業医の西 賢一郎さんにお話を伺った。

働く人々の仕事内容や背景事情も考え 常に本人にとって最良の選択を

会社や組織で働く人は、一般的に人生の約3分の1を職場で過ごします。そうした非常に長い時間を過ごす場所で、働く人々に関わる産業医は、その方の仕事内容はもちろん、生活状況や本人のこれまでの経験といった背景を含めて、何が本人にとって最良な選択であるのかを考えながら対応することが大切だと考えます。

最初のきっかけはたまたま健康上の不調があつて関わったという方々ですが、回復した後も職場でお会いする機会はあるので、長い付き合いができることも魅力であり、「あの時は大変でしたね」と話ができる関係性をつくるように心がけています。

私が当社に着任してから見てきた、近年の「働き方改革」が産業保健スタッフに与えた影響として、経営者も含め、

社員の長時間労働についての意識が変わったことがあげられます。ダラダラと仕事をする習慣が少なくなり、時間外労働は減ってきています。そのよい影響として、疲労や過重負荷を背景に持つメンタルヘルス不調も、最近では少なくなってきたように思います。これは私たち産業保健スタッフも同様で、メリハリをつけて仕事を行うようになり、慢性的な残業は少なくなりました。

また、以前は血圧や血糖値のパニック値で就業制限を検討しなければならなかったような社員も多く見ましたが、最近では健康状態の悪化を見る機会も少なくなっているように感じます。定期健康診断結果を見ると、生活習慣病の悪化する社員が以前と比較して減ってきたように感じます。余暇ができることで生活の乱れが少なくなったのかもしれませんが。

当社は60歳を定年とし、その後は契約社員として「シニア雇用」と呼ばれる雇用形態で65歳まで勤務する方々が

多いのですが、健康づくり活動の一環として行っている体力測定のお機は、高年齢労働者の方々にご自身の体力を実感していただくよい機会になっています。高年齢労働者に対する特別な配慮をしているということはありませんが、工場内での段差の有無や、事務所作業におけるパソコンなどの画面の文字の大きさ、画面の明るさなど、職場巡視中に気になった点は都度本人の話を聞きながら改善提案を行っています。

働く人の健康に対する意識が変化し 産業医の役割が認知され始めている

産業医の行う業務に関しては、基本的に以前と変化はないと思いますが、注目度合いは変わってきていると思います。「働き方改革」にも産業医・産業保健機能の強化がうたわれていることから、世の中や会社において、働く人の健康に注目する機会が増え、「産業医」という言葉がよく登場するようになりました。

私が産業医を始めた16年前を振り返ると、産業保健機能や産業医制度は、それまでの先輩方が築き上げたものが機能し始めて、私たちはルールの上を歩みながら修練を積み、発展させていくという時代だったと思います。私は大企業での経験を経て、嘱託産業医も経験しましたが、中小企業においては産業医がどのようなことをするのか具体的には知らない会社も多く、産業医に求められる質がまったく違うことを感じる機会が多くありました。

しかし、昨今は企業規模によらず、「しっかり社員の健康を見てくれる先生」を求める会社が増えてきたと感じています。現在、静岡産業保健総合支援センターの相談員として、事業者に対して産業保健機能の紹介をする機会がありますが、「社員の健康管理についてアドバイスしてくれる産業医はどこにいるのか」とよく聞かれるようになりました。こんなところにも、会社が産業医の役割を理解し始めてきたことを感じます。また、産業医側も研修会などで得た知識を職場でしっかり還元する、求めら

れる役割を果たす、という認識を持った先生が増えてきたと思います。

産業医がいることで 安心して業務ができる環境を整える

私が現在取り組んでいるのは「顔の見える関係」の構築です。例えば、産業医の職場巡視の機会に可能な範囲で行う作業者への声かけ、社内報などの職場向け媒体の作成、健康増進イベントの開催など、顔を見せる機会を増やし覚えてもらうこと。また、保健師には昼休みに工場の事務所に出勤し、現場作業の社員に健康教育を含めた意見交換の機会をつくるよう産業医としてアドバイスをしています。その結果、産業保健スタッフの存在を知る社員の数が増えてきており、現在進めている新型コロナワクチン職域接種の現場でも、顔を知った社員が接種にきて、気軽に声をかけてくれる様子などを見ていると、それがよくわかります。

産業医としての今後の目標は、産業医がいることで安心して業務ができる環境をつくっていくことだと考えています。残念ながら、まだ私たちは、「体調が悪くなったら必要な人」として認識されている面が強いのと思います。そうではなく、生き活きと仕事をするために「活用する人」たち、という認識に変えていくことが重要だと思っています。それは一般社員のみならず、経営層にもそう感じていただけるようにしていきたいですね。法律での選任義務がなくても「産業医がいてよかった」と思ってもらえる存在になることが、一つの目標だと思います。

一方で、地域の産業保健スタッフのレベルアップのために研修会なども企画しています。活動によって、一握りの人たちだけが成長するのではなく、知見を広く共有することで地域で活動するスタッフの成長を狙って、産業保健サービスがさらに行き渡ることを視野に入れながら、今後も活動を進めていきたいと考えています。